



沼津市制 100 周年記念誌

# 読む×見る×わかる 沼津の文学

沼津市教育委員会



大正 8 年 香貫山から見た沼津

## 『読む×見る×わかる 沼津の文学』の刊行について

沼津市は北に富士山、南に駿河湾を望む、自然に恵まれた景勝の地です。一年を通じて気候が温暖なため、豊かな天産にも恵まれています。古くから東海道の交通、軍事や商業上重要な地であり、近代以降も様々な文学者を輩出するとともに、数多くの作品に描かれてきました。

令和五年、沼津市は、市制百周年の節目の年を迎えました。本市ではこれを記念し「沼津ゆかりの文学者たち」と題して、企画展や出張展示、文学散歩や講演会など様々なイベントを実施し、沼津と関係の深い文学者にスポットを当て、その作品の魅力を発信して参りました。

そのひとつとして、沼津にゆかりの深い様々な文学者を主に市内の中学生・高校生を対象として、そのひとつとなりや作品に触れる機会とすべく、本冊子を制作することといたしました。この冊子が沼津と文学とに興味を持つ契機となれば幸いです。

なお、本冊子を刊行するにあたり、資料提供並びにご指導いただいた関係各位に、この場をお借りして、厚く御礼を申し上げます。

令和六年三月三十一日

沼津市芹沢光治良記念館

# 目次

■ 『読む×見る×わかる 沼津の文学』の刊行について……………	1
■ 寄稿	
『読む×見る×わかる 沼津の文学』の刊行によせて 沼津市長 頼重秀一……………	3
『読む×見る×わかる 沼津の文学』の刊行によせて 沼津市教育長 奥村 篤……………	4
沼津市制百周年に寄せて 沼津市芹沢光治良記念館助言者 鈴木吉維……………	5
■ 沼津ゆかりの文学マップ(近・現代編)……………	6
■ 沼津市制百周年と文学……………	10
■ ゆかりの文学者たち	
芹沢光治良 11 井上 靖 20 大岡 信 28 若山 牧水 36	
明石 海人 41 大岡 博 46 太宰 治 50 田中 英光 54	
江崎 惇 57 川村 晃 59 佐藤 雅彦 62 鈴木 英治 65	
秋山 香乃 68 曾根 圭介 71 宇佐見りん 73	
■ ゆかりの施設……………	75
■ 沼津ゆかりの文学者(近・現代編)……………	76
■ 主な参考文献……………	83
■ 協力……………	84

『読む×見る×わかる 沼津の文学』の刊行によせて

沼津市長 頼重 秀一

沼津市は、大正十二（一九二三）年七月一日に県内三番目の市として誕生し、その後周辺町村との合併を経て、令和五年に百周年を迎えました。

この機会に、改めて本市の魅力を再発見するとともに、次世代に誇り高い沼津を継承するべく、市民の皆様と共に、その自然、歴史、文化などをテーマとして様々な記念事業を展開してまいりました。

そのなかで、本市の文化のうち文学については「沼津ゆかりの作家顕彰事業」と題し、本市名誉市民でもある芹沢光治良先生、井上靖先生や大岡信先生の三氏を中心に、現代までの本市にゆかりのある様々な文学者を、企画展示、出張展示、講演会や文学散歩などの様々な催事を通じて紹介し、市内外から多くの方のご参加を賜りました。

本市は北に霊峰富士を仰ぎ、南には波静かな奥駿河湾を囲む、豊かな自然と穏やかな気候に恵まれております。その風光明媚な景観は、いにしえより多くの人々を引きつけ、多くの文人墨客が訪れる街でした。

このような沼津の文学風土を知り、その足跡をたどり、次の百年に向けて後世に伝えていくことが今の沼津に生きる私たちの使命なのだと考えております。

本書は、主に沼津市芹沢光治良記念館にて開催した企画展「沼津ゆかりの文学者たち」で取り上げた文学者について、そのひととなりや作品を紹介したものです。

本書を読むことにより、中学生の皆さんが沼津にゆかりのある多くの文学者についての理解を深め、高校生や一般の方々にとってもその業績を再認識していただき、あらためて郷土の魅力を感じていただければ幸いです。

最後になりましたが、本事業開催に際し、各文学者の関係者の皆様から、多大なるご支援とご協力を賜りましたことに、改めて深く感謝を申し上げます。

『読む×見る×わかる 沼津の文学』の刊行によせて

沼津市教育長 奥村 篤

沼津市は、風光明媚で気候温暖な土地柄により、古くから多くの文人墨客がこの地を拠点として活躍されています。

なかでも名誉市民である作家の芹沢光治良先生や井上靖先生、詩人の大岡信先生の三氏をはじめ、歌人の若山牧水先生や明石海人先生などが、この地に魅せられ、数々の作品を描き、功績を残しています。

本市はこのように多くの作家、歌人、詩人や俳人などを養成、輩出してきたまさに「文学のまち」です。

本年（令和五年）七月、本市は市制百周年という記念すべき節目の年を迎えました。これまでの沼津を振り返る中で「先人達への感謝と敬意」、「郷土への誇りと愛着」、「市民との協働」、そして「次の百年への新たな一歩」をコンセプトとして様々な事業を展開してきました。

そのなかで、沼津の文化、とりわけ文学については「沼津ゆかりの作家顕彰事業」として取り上げ、芹沢光治良記念館における「沼津ゆかりの文学者たち」と題した企画展示や、市役所や市内施設での出張展示、講演会や文学散歩といった催事を通じ、一年間にわたり、多くの方にその業績や魅力を紹介してまいりました。

本書は、その記念事業の集大成として刊行するものです。主に市内の中学生を読者の対象とし、近代から現在までの様々な文学者について、本市との関わりを中心に人物像や作品を紹介しています。

本書をきっかけとして、中学生の皆さんがそうした沼津にゆかりの深い様々な文学者の偉業を知り感性を育むことにより、将来の沼津市の文化の発展を担う人物となる事を願っています。また、本書を通して市民の皆様にとりましても、沼津の文学の魅力を再認識できるものとなれば幸いです。

末筆となりますが、本事業の実現に向けて、御尽力いただきました関係者の皆様方から感謝申し上げます。

## 沼津市制百周年に寄せて

沼津市芹沢光治良記念館助言者

鈴木吉維

かつて私は沼津の地をよく歩きました。狩野川、我入道、不動岩、千本浜……。海や川を眺めていると、日々の辛いことが少しずつ消えていきます。自分の心と対話するときには海を見るのがよい、なぜなら海は人間の小ささを教えてくれ、謙虚な気持ちにさせてくれるからです。透明になった心で振り返ると、愛鷹山を前景とした富士山がこちらを向いています。その威容は不思議と暖かく、つねに私の心を励ましてくれます。そうだ、純粹に生きていこう、そんな勇気が湧いてくるのです。

人生はいつも順風満帆というわけにはいきません。特に若いときは不安と迷いの中にいるものです。心が悲鳴を上げているときは、かつて同じ道をたどった人生の先輩の言葉に耳を傾けてみましょう。どのようにして運命を乗り越えたのか、どうやって逆境からの第一歩を踏み出したのか、それを記したものが文学作品なのです。

沼津は芹沢光治良や井上靖、大岡信といった、日本を代表する素晴らしい文学者を生んだ土地です。彼らは沼津で青春時代を過ごしたことを作品に残しています。青年期は人生の基礎を養い、後の生き方に多大な影響を与える大切な時期ですから、苦しいこと、悲しいこと、そして心躍るような胸の高鳴りなど、人生を決定づけた若い頃のことを読者に伝えたかったです。

若山牧水は、長い旅の果てに沼津を定住の地に選びました。太宰治や田中英光は、海を見、山を眺め、人々と対話しながら小説を生み出していきました。有名無名を問わず、様々な文化を育む風土が確かにここにはあるのです。沼津市制百周年をひとつの契機として、多くの先人たちが残してくれた文学作品をぜひお読みください。そこには今につながる文学の魂が息づいています。それはこれから生きる糧となる宝石なのです。





①静岡県立沼津東高校

芹沢光治良・井上靖・大岡信の母校。3人の詩碑 横爪健・落合京太郎・大岡博・江崎伸・川村晃・佐藤雅彦・曾根主介の母校



②勝田香月墓所

沼津市東熊堂・大泉寺内



新東名高速道路

③沼津市立沼津高校

渡辺白泉句碑/白泉が教師を務めた学校/鈴木英治の母校



愛鷹PA

⑤清水杏芽句碑

沼津市大諏訪・天満宮(吉祥院)内



⑥明石海人墓所

沼津市西岡門共同墓地内



⑦若山牧水旧居跡

沼津市本西松下



帯笑園  
旧植松家/芹沢光治良が  
住み込みの家庭教師を務めた場所

松蔭寺  
白隠禪師ゆかりの寺/芹沢光治良が  
高等文官試験の勉強で合宿



⑪妙覚寺

木下圭太郎が中学時代に宿泊  
井上靖が中学時代に下宿



沼津市立片浜小学校  
明石海人の母校

⑫沼津市民文化センター

旧制沼津中学校(現・沼津東高校)跡地  
施設内に芹沢光治良・井上靖詩碑





凡例

- 市内の史跡等のうち、主な近・現代の文学者に関するものを記載した。
- 句碑については、このほかに光長寺、岡宮浅間神社（岡宮）、大中寺（中沢田）、紹因寺（沢田）、蓮光寺（三芳町）、耕雲寺（大岡）、真楽寺（末広町）、いきいきホーム松下（松下町）、乗運寺（幸町）、天満宮、浄因寺（三津）等にもある。
- 香貫山、千本松原、狩野川、我入道海岸、江浦、三津、戸田等の市内を舞台として描いた作品は多数あり、本地図では紙幅の都合上、記載は省略した。

1km

⑬ 芹沢光治良文学碑

沼津市立第三中学校内



⑰ 勝田香月記念碑

港口公園内



⑲ 芹沢光治良生誕地碑

沼津市我入道東町



⑳ 芹沢光治良詩碑

我入道連合自治会館



㉑ 孤絶の碑

我入道海岸・芹沢光治良句碑



⑳ 積惟勝歌碑

我入道公園内



㉒ 安田屋旅館

太宰治文学碑/太宰が滞在し「斜陽」を執筆



太宰治が滞在した客室



「斜陽」文学碑

㉓ 吟道之碑

沼津市西涌江梨



大瀬崎  
ビャクラン  
樹林

⑳

㉓

↓至 沼津市戸田

## 沼津市制百周年と文学

大正十二（一九二三）年七月一日、沼津町と楊原村が合併して沼津市が誕生しました。沼津は古くから東海道の宿場町であり、近代以降も政治、経済、文化の中心地として発展してきました。

北には愛鷹山がそびえ、その背後には高く美しい富士山を望みます。市の中心部を流れる狩野川は駿河湾へと注ぎ、海岸線は千本松原から三津を経て、最南部の戸田に至るまで約六十kmを有しています。

このような自然環境に恵まれた沼津の風土は、文学にも様々な影響を与えています。特に明治時代以降は多くの文学者を輩出し、様々な文学作品の舞台としても描かれてきました。ゆかりのある文学者としては、若山牧水、芹沢光治良、明石海人、大岡博、井上靖、太宰治、田中英光、江崎惇、川村晁、大岡信、佐藤雅彦、鈴木英治、曾根圭介、秋山香乃、宇佐見りんなど、数えきれないほどです。

この冊子は、これまで百年の間に沼津の文化に多大な影響を与えた文学者を取り上げるとともに、未来を彩る現代の文学者にも視野を広げて顕彰し、今後の文化の発展を期待するものです。



沼津市に生まれ育った作家

芹沢 光治良 明治二十九年〜平成五年



昭和48年 芹沢文学館前で

明治二十九年、駿東郡楊原村（現・沼津市）我入道に網元の子として生まれます。本名は光治良。楊原尋常高等小学校（現・沼津市立第三小学校）を卒業後、旧制沼津中学校（現・沼津東高等学校）に進学するまでの間に、沼津尋常高等小学校（現・沼津市立第一小学校）の代用教員を務めました。その後、原町（現・沼津市原）の植松家に家庭教師として住み込みます。

東京帝国大学（現・東京大学）経済学部を卒業後、農商務省の官吏（現在の国家公務員）を経て、フランス・パリ大学へ留学します。当時、死病として恐れられた肺結核に罹るものの、スイスやフランスで療養し、作家になる決意を固めます。

帰国後、昭和五年に「ブルジョア」を『改造』の懸賞創作に応募し、一等に当選して作家となります。以後多くの作品を著しましたが、中でも沼津中学時代から書き始めた自伝的大河小説『人間の運命』（昭和三十七〜四十三年）は高い評価を得ました。

日本芸術院賞、フランス芸術文化勲章コマンドゥールなどを受章、第五代日本ペンクラブ会長など数々の重要な役職を務めました。

昭和三十八年、我入道海岸に文学碑「風に鳴る碑」が建立されます。昭和四十五年、我入道に芹沢文学館（現・沼津市芹沢光治良記念館）が開館。昭和五十五年、名誉市民の称号を贈呈されます。昭和五十七年、我入道海岸に文学碑「孤絶の碑」が建立されました。また、沼津中学校跡地である現・沼津市民文化セン



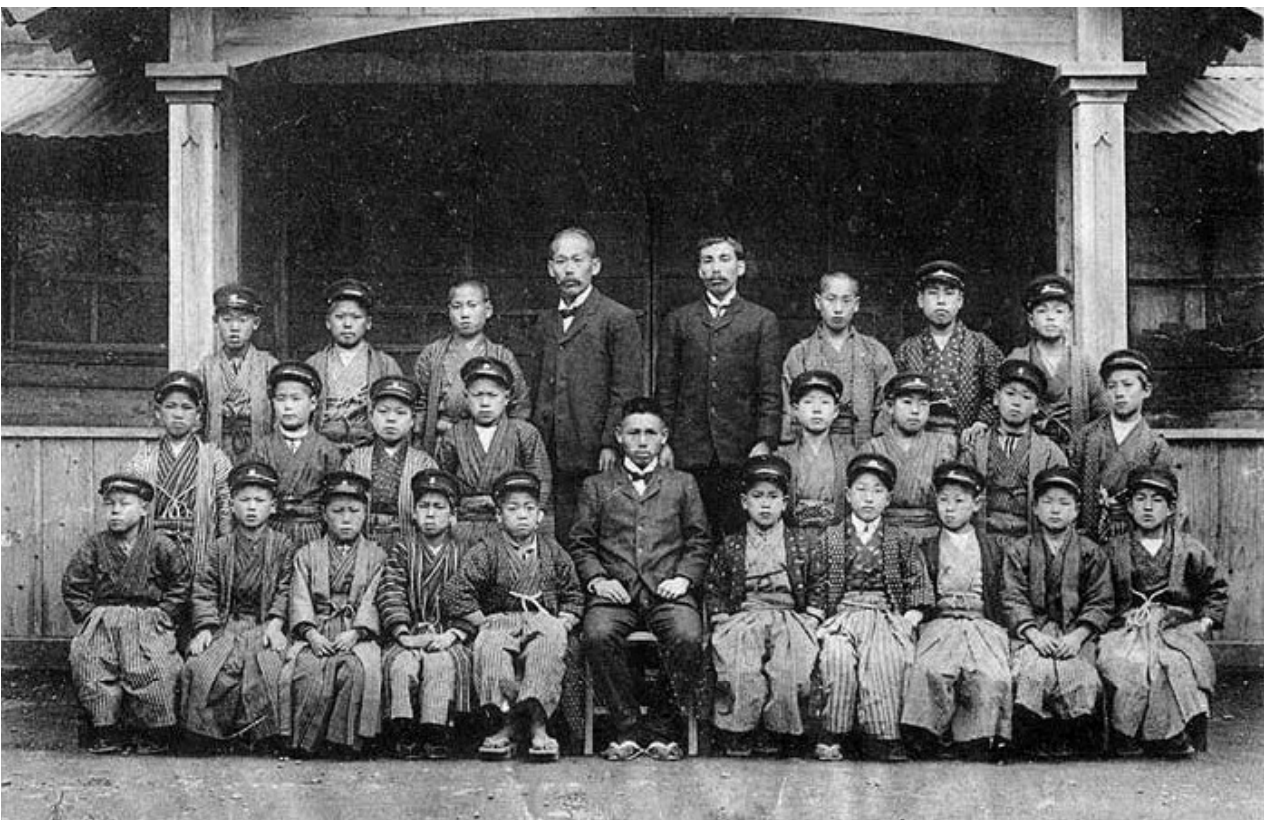
生誕地碑（我入道東町）

ターと、母校である沼津東高等学校に、芹沢光治良・井上靖の詩碑と文学碑が建立されました。

平成五年、老衰ろうすいのため死去、沼津市中瀬町なかせちまうの市営墓地に眠っています。

■ 光治良の生まれ育った我入道（第三地区）

故郷・我入道には、生誕地碑や文学碑など多くのゆかりの場所があります。



楊原小学校（現・沼津市立第三小学校）卒業記念写真 前から2列目左から2人目が光治良



文学碑「風に鳴る碑」と碑文



昭和 38 年 3 月 風に鳴る碑除幕式にて



我入道連合自治会館

われこの地に生れ 跣はだしで育ちて  
 世にはばたけど 時に西風胸を叩きて  
 だせん(難船)だとおびやかしてやまず  
 されど清き狩野の流 心を洗ひ  
 けだかき富岳は常にわれを上げませり  
 翁おきなになりて帰れば  
 村人は豊かに極楽人になりて我を迎う  
 思へばありがたきかな  
 本籍ここにありて  
 極楽人の仲間なるを  
 一九八三年  
 八十六翁 光治良

我入道連合自治会館にある光治良の詩碑碑文



文学碑「孤絶の碑」(我入道海岸)



狩野川河口から我入道方面

## ■作品に描かれる沼津

### 人間の運命（小説）

この作品は、光治良が六十歳を過ぎてから、それまでの半生を基にして明治・大正・昭和時代の日本を描いた大河小説です。次の文章は、沼津中学校に通う主人公・森次郎が、美術と国語の教師・前川から、香貫山に連れられて故郷・沼津の風景の美しさを教わる場面です。

次の図画の時間に、（前川）先生は野外写生だと称して、中学校の裏から、一<sup>キロメートル</sup>軒ばかり離れた香貫山へつれ出した。落葉を掻く<sup>か</sup>近在の人々が踏みならした<sup>メートル</sup>けわしい小径を、一列になつてやつと二百米も登ると、尾根の一角らしい二三十坪の平地に出た。（略）

「（略）こんな美しい風景の土地は、あんまりないよ。よく一望のうちに故郷をおさめて、景色が美しいということを知るんだな。（略）」

わが住む土地を、次郎は初めてよその土地のように眺める思いで、目を見張った。

眼下にひろがったパノラマの中央に、足下の山麓から駿河湾へ、白く光って大きくS字形を描いているのが、あの狩野川であろうか。こんなにも川幅が広くて、まんまんと水を張っているとは知らなかった。その右岸にかたまって静かな家々が、沼津の街であろうか。二万足らずの人口が、このなかにかくれているのであろうか。（略）

河口から千本松原をへて三保松原につづく松林が、こんなに一<sup>ひと</sup>捌けの黒色であろうか。町の北側に、屏風のように愛鷹山が控えているが、その頂が切りとられたようにけずられて、その上に富士山がのり、愛鷹山の斜面は遠く東に箱根山につらなっている。次郎は息をのんで眺めていた。

初刊 昭和三十七〜四十三年 新潮社  
本文の引用は完全版 平成二十五年 勉誠出版





香貫山から見た沼津市街地方面



沼津中学校卒業の頃



大正4年 沼津中学校卒業の頃友人と  
(左)光治良



光治良が住み込みの家庭教師を務めた  
旧植松家・帯笑園(原)



光治良が代用教員を務めた沼津尋常高等小学校  
(現・市立第一小学校)

## ■名誉市民に選ばれる

光治良は、故郷・我入道の人たちの要望で、沼津市の名誉市民（市民や沼津市にゆかりのある人で、学術等の分野で文化の進展に貢献したり、またはその業績が優れていて市民に尊敬される人）に推薦され、昭和五十五年に称号を贈られました。このときに次のエッセイを発表し、故郷沼津への感謝の思いを綴っています。

## 故郷沼津（随筆）

私は旧制の一高<sup>(1)</sup>に入学して故郷を去って以来、故郷はないものとして、棲<sup>す</sup>むところを常に故郷だと考えて生きた。

東京では東京を故郷とし、パリではパリを故郷として暮<sup>くら</sup>した。そんな淋<sup>さび</sup>しい私の心を、後年中学校の先輩のO氏が故郷に向けさせてくれた。そのとき私は六十三歳だったが、故郷の豊かな自然、美しい風物<sup>ふうぶつ</sup>、明るい光が、私の性格をつくっているばかりでなく、私の文学の基本をなしていることに初めて気付いて驚き、故郷を

有<sup>あり</sup>難<sup>がた</sup>いものとして頭<sup>こゝろ</sup>を垂<sup>た</sup>れた。そう言えば、三十歳頃、死病をスイスの高原で闘<sup>たたか</sup>っていたとき、少年の日、大瀬崎<sup>おせざき</sup>から仰<sup>おぼろ</sup>いだ壮<sup>そうごん</sup>厳<sup>げん</sup>な富<sup>ふ</sup>岳<sup>がく</sup>や牛<sup>うし</sup>臥<sup>ぶせ</sup>山頂<sup>さんてい</sup>で向きあつた優しい富士が、しばしば瞼<sup>まぶた</sup>に浮<sup>うか</sup>んでは、生きて還<sup>かへ</sup>るんだと激励したことも忘れられない。

初出 『芹沢光治良先生名誉市民称号贈呈式パンフレット』

昭和五十五年 沼津市役所

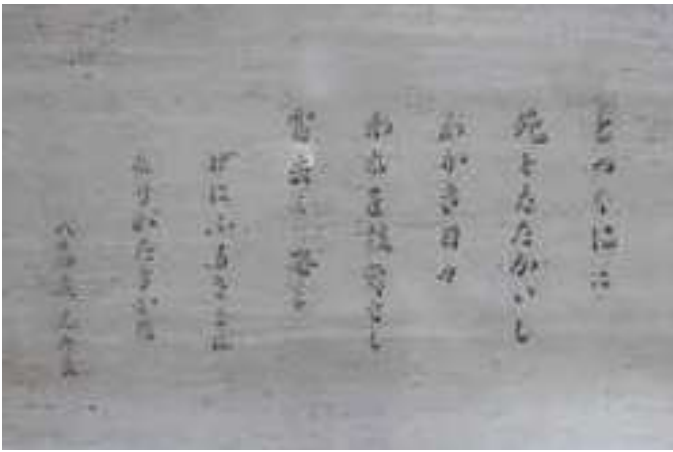
注

(1) 現在の東京大学教養学部相当

(2) 重々しくて立派なこと



名誉市民章受章時 庄司沼津市長と



光治良が通学した頃の沼津中学校跡地  
(現・沼津市民文化センター)

注

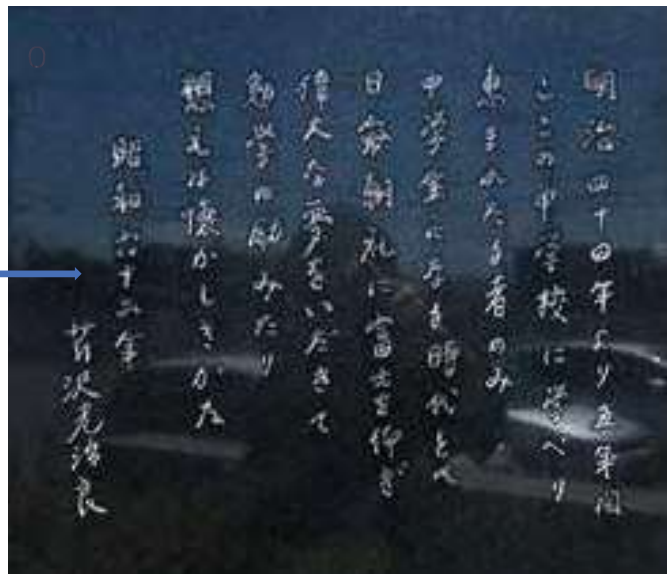
とづくに<sup>①</sup>  
 死とたたかいし  
 わかき日々  
 われを鼓舞せし<sup>②</sup>  
 富岳よ 海よ  
 げにふるさは<sup>③</sup>  
 ありがたきかな  
 八十四歳 光治良

(1) 外国  
 (2) はげまし勢いづける  
 (3) まことに

沼津市民文化センター内にある光治良詩碑



沼津東高校内の芹沢光治良・井上靖詩碑



明治四十四年より五年間  
 この中学校に学べり  
 恵まれたる者のみ  
 中学生になる時代とて  
 日毎朝礼に富士を仰ぎ  
 偉大な夢をいだきて  
 勉学に励みたり  
 想えば懐かしきかな  
 昭和六十二年  
 芹沢光治良



光治良墓所(中瀬町・市営墓地)

現在、手に入る作品を紹介します。

■読める芹沢光治良の作品



わが命果てて  
 天に昇るとも  
 魂の故里パリ・東京に  
 舞いもどるたび  
 命の故里沼津に飛びて  
 市民を見守り幸を祈らん  
 九十一翁 光治良

沼津市民文化センター庭にあった  
 光治良詩碑  
 (令和5年現在、香陵公園周辺整備  
 事業実施中のため、沼津東高校へ一  
 時移転)



- 『愛蔵版『人間の運命』全七巻セット(平成三年 新潮社) あいぞうばん
- 『芹沢光治良文学館』全十二巻(平成七、九年 新潮社)
- 愛蔵版『神と人間』全八巻セット(平成十八年 新潮社)
- 完全版『人間の運命』本編十六巻・別巻二巻  
 (平成二十五年 勉誠出版)
- 『芹沢光治良戦中戦後日記』(平成二十七年 勉誠出版)
- 少女小説集『緑の校庭』(平成二十九年 ポプラ社)
- 新装版『巴里に死す』(令和元年 勉誠出版)
- 『サムライの末裔』(令和元年 小学館)
- 『孤絶』(令和三年 小学館)
- 『ブルジョア・結核患者』(令和五年 小学館)

## ■ 沼津市芹沢光治良記念館

昭和四十五年五月三十日、光治良の旧制沼津中学校の後輩である岡野喜一郎（元スルガ銀行会長）が設立した旧財団法人芹沢・井上文学館により、光治良の生誕地である沼津市我入道に建設され、長年運営されてきました。平成二十一年四月一日、同財団法人から沼津市に寄贈され、同年十月一日に「沼津市芹沢光治良記念館」としてリニューアルしました。

設計者の菊竹清訓は、光治良とその文学を具体的に表現するため、様々なモチーフを



沼津市芹沢光治良記念館

所在地：静岡県沼津市我入道蔓陀ヶ原517-1



1階展示室



2階市民ギャラリー

建物に取り入れてあります。そのひとつとして、光治良がフランスへ留学したことやフランス文学の影響を受けているため、外観はヨーロッパにある中世の教会をイメージしています。

一階展示室では、我入道で生まれ育ち、沼津市名誉市民でもある光治良の人物像や業績、作品を広く知ってもらうことを目的として、光治良に関連した企画展を開催しています。

また、二階展示室を市民公募によるギャラリーとして開放し、沼津市の文化に関する展示やミニコンサート等を行うことで様々な文化を市民に提供することも目的としています。

多感な青春時代を沼津で過ごした作家

井上靖 明治四十〜平成三年



昭和46年正月 撮影：二村次郎  
(長泉町井上靖文学館所蔵)

る妙覚寺などに下宿し、友人らの影響を受けて文学を始めます。

旧制第四高等学校(現・金沢大学)、九州帝国大学(現・九州大学)を経て、京都帝国大学(現・京都大学)文学部哲学科を卒業後、大阪毎日新聞社(現・毎日新聞社)に入社します。

明治四十年、

北海道旭川に生まれ、幼少時を両親の故郷・天城湯ケ島(現・伊豆市)で過ごします。大正十一年、旧制沼津中学校(現・沼津東高等学校)二年生に転入、沼津市下河原にあ

昭和二十四年「闘牛」を執筆、翌年、同作により芥川賞を受賞します。後、日本芸術院賞、文化勲章など数多くの賞を受賞、第九代日本ペンクラブ会長など数々の重要な役職を務めました。

昭和三十八年、中学時代に友人と多くを過ごした千本浜公園内に文学碑が建立されます。翌年から、中学時代を描いた自伝的小説「夏草冬濤」を『産経新聞』に連載(昭和四十一年刊)。昭和四十八年、長泉町に井上文学館(現・長泉町井上靖文学館)が開館。昭和五十八年に沼津市名誉市民の称号を贈られます。

また、沼津中学校跡地である現・沼津市民文化センターと、母校である沼津東高等学校に、芹沢光治良・井上靖二名の詩碑と文学碑が建立され、以後も市内に多数の文学碑が建立されました。



千本浜公園の文学碑

■ 中学（現在の高校）時代を過ごした沼津  
 靖が沼津中学校に通学していた頃の沼津は、  
 まだ沼津町と言い、大正十五年に卒業するまで  
 の間に隣の楊原村と合併して沼津市になりました。  
 次の文章は、沼津市になって六十周年を迎え  
 た、昭和五十八年に記したエッセイです。この年  
 七月には、名誉市民の称号が贈られました。

### 千本浜に夢見た少年の日々（随筆）

（略）沼津市が  
 市制を布いた大正  
 十二年（一九二三  
 年）という年は、私  
 の沼津中学三年  
 生の時に当る。そ  
 の頃のことを振り  
 返ってみると、気の  
 遠くなるようなは  
 るかな思いであ  
 る。



当時の千本浜海岸  
 （沼津市明治史料館所蔵）

今日、私は作家として立っているが、そのもと  
 になっている総てのものを、少年時代を過した  
 沼津という町に負うていると思う。私が作家と  
 なるためには香貫山も必要であったし、狩野川  
 も、千本浜も必要であったのである。もちろん、  
 そうしたところを一緒に歩き廻った友人たち  
 なしには、私の今日はあり得なかったと思う。  
 少年時代を沼津で過したことは、私の持った大  
 きい幸運であった。

初出 沼津市制六十周年記念誌『グラフ沼津明日へはばたく』

昭和五十八年 沼津市役所



沼津中学校時代  
 （長泉町井上靖文学館所蔵）

## ■作品に描かれる沼津

### 夏草冬濤なつぐさふゆなみ（小説）

この作品は、靖の自伝に基づいた小説『しろばんば』の続編で、主人公・伊上洪作いがかこうさくの過ごした沼津中学時代を描いています。ここでは、上級生の仲間たちと御成橋から狩野川を眺める場面を紹介します。

土曜日に、洪作は増田と小林と三人で千本浜に海を見に行くことにした。（略）

増田が、

「千本浜へ行こうや」

と言いつつ、

洪作は文句なしに、すぐそれに賛成いぜんせいした。小林も異存いぜんはなかった。

三人は校門を出ると、いつもとは反



対に沼津の街の方へと歩き出した。それだけでも、三人の心は弾はずんだ。

御成橋を渡った。三人は御成橋の上で狩野川の流れを見降ろした。

「日本で何番目の川か知ってるか」  
小林がそんな質問を出した。（略）

洪作は汽車の窓からではあるが、天竜川も、大井川も、富士川も見えていた。いずれも大河として知られた川である。そうした大きい川のある静岡県でも

狩野川はそれに続く川であるし、大きさを別にすれば、静岡県では勿もち論ろんのこと、日本でも有数の美しい川であるに違いないと、洪作は思っていた。思っ



沼津中学校時代 友人と（左）井上靖  
（長泉町井上靖文学館所蔵）



いたというより信じていたと言った方が当たっていた。

洪作は、そのことをいつもこの御成橋を渡る時思った。御成橋の上から見る眺めも、いかにも都会の川といった感じで、橋付近の両岸は人家や倉庫で埋められている。その人家や倉庫の列が切れると、上流の方は青草に覆われた堤になり、川筋はゆるやかに大きく身をくねらせて視野から消えている。そして下流の方は少しずつ川幅を広くし、

河口らしい貫録かんろくを示して来る。

しかし、洪作が狩野川を日本で有数の美しい川であると信じているのは、この沼津の町中を流れている狩野川のゆったりとした姿態しただいの美しさのためではなかった。御成



御成橋と狩野川

橋の上立あたまって、上流の方に眼を遣やる時、洪作にはいつも天城山あまぎさんに源を発している狩野川という川の、その長い一本の川筋が眼に浮かんで来るからであった。

初出 『産経新聞』昭和三十九〜四十年  
初刊 昭和四十一年 新潮社

注

(1) 違った意見や反対の意見



昭和 58 年 7 月 沼津市名誉市民に選ばれる  
(長泉町井上靖文学館所蔵)

■市内の井上靖文学碑

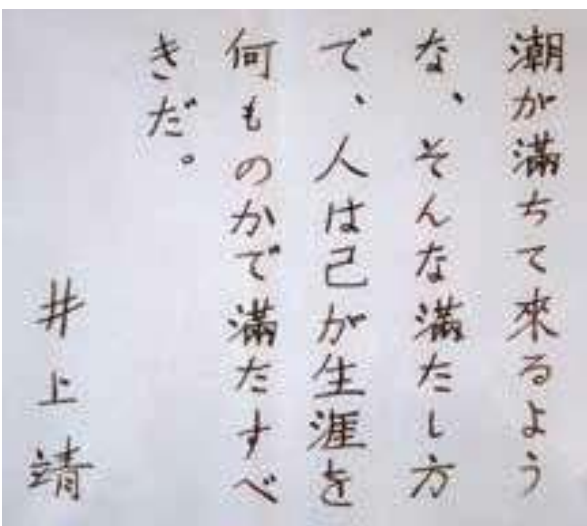
靖の文学碑は市内六か所に七基あります。その一部を紹介します。(全部の碑写真は六く七ペー  
ージのマップに掲載)



昭和38年3月 千本浜公園の文学碑 除幕式  
右から1人目 井上靖(長泉町井上靖文学館所蔵)



千個の海のかげらが  
千本の松の間に  
挟まっていた  
少年の日  
私は 毎日  
それを一つずつ  
食べて育った  
井上靖



母校の沼津東高校にある芹沢光治良・井上靖詩碑(岡宮)



中学時代に下宿した妙覚寺と  
境内にある文学碑 碑文(下河原)



思うどち  
遊び惚けぬ  
そのかみの  
香貫  
我入道  
みなどまち  
夏は 夏草  
冬は 冬濤  
井上靖



ふるさと  
井上靖

ふるさと」という言葉は好きだ。古里、故里、故郷、そして故園、郷関、—故園は軽やかで、颯々と風が渡り、郷関は重く、憂愁の薄暮が垂れこめてい  
るが、どちらもいい。しかし、私の最も好きなのは、論語にある「父母国」という呼び方で、わが日本に於ても、これに勝るものはなさそうだ。ふるさとはまことに、「ちちははの国」なのである。

ああ、ふるさとの山河よ、ちちははの国の雲よ、風よ、陽よ。

注

(1) うれい悲しむこと  
(2) 夕暮れ、たそがれ

沼津中学校跡地の沼津市民文化センターにある詩碑(御幸町)

■読める井上靖の作品

多数刊行されており、ここではその一部を紹介します。

文庫版

『猟銃・闘牛』（昭和二十五年 新潮社）

『あすなる物語』（昭和三十三年 新潮社）

『しろばんば』（昭和四十年 新潮社）

『夏草冬濤』上・下巻（昭和四十五年 新潮社）

『幼き日のこと・青春放浪』（昭和五十一年 新潮社）

『北の海』上・下巻（昭和五十五年 新潮社）

『わが母の記』（平成二十四年 講談社）

など多数



## ■長泉町井上靖文学館

昭和四十八年十一月二十五日、靖の旧制沼津中学校の後輩である岡野喜一郎（元スルガ銀行会長）が設立した旧財団法人芹沢・井上文学館により井上文学館として建設され、長年運営されてきました。場所は、沼津市の北方、長泉町の愛鷹山麓にある東野（駿河平）です。令和三年四月、一般財団法人井上靖文学館から長泉

町に移管され、同年七月十七日に「長泉町井上靖文学館」としてリニューアルしました。靖の代表作『あすなる物語』の中で、主人公が



長泉町井上靖文学館  
所在地：駿東郡長泉町東野515-149

詠むへ寒月ガカカレバ／キミヲシヌブカナ／アシタカヤマノ／フモトニ住マウ」という歌にちなみ、この地に文学館が建てられました。外観は、『しろばんば』に登場する土蔵をモチーフとしています。

靖に関する初版本や限定本などの希少な書籍、原稿や万年筆といった愛用品を含め、約三千点の資料を所蔵し、一階展示室では、靖の生涯、業績や代表作の紹介展示と企画展を開催しています。

二階は、幅広い年代の方が本に親しんでもらえるように、自由に本が読めるスペース「ミュージアムライブラリー」として利用できます。



1階展示室



2階ミュージアムライブラリー

沼津でロマンを育んだ詩人

大岡 信 昭和六く平成二十九年



昭和 45 年  
(大岡かね子氏所蔵)

昭和六年、  
田方郡三島町  
(現・三島市)  
に生まれます。  
昭和二十二年、  
旧制沼津中学  
校(現・沼津東  
高等学校)四  
年生を修了。在学中に教師や仲間と同人誌  
『鬼の詞』を創刊し、短歌や詩を発表します。  
旧制第一高等学校を経て東京大学文学部国  
文科卒業後、読売新聞社に入社しました。

勤務の傍ら詩作を続け、昭和三十一年に第  
一詩集『記憶と現在』を刊行。以後、文化勲章  
など数多くの賞を受賞し、第十一代日本ペンク  
ラブ会長など数々の重要な役職を務めました。

青年時代、後に妻となる相澤かね子と会う  
ため、しばしば沼津を訪ねました。かね子は、沼

津市に生まれ育ち、沼津学園高等女学校(現・  
飛龍高等学校)を卒業しましたが、大岡とは、  
大岡の旧制沼津中学校時代の友人を通じて  
知り合い、後に沼津で偶然出会ったことで交際  
が始まりました。

かね子への思いを綴った詩「春のために」  
(『記憶と現在』昭和三十一年)、結婚後の「サ  
キの沼津」(『水府 みえないまち』昭和五十六  
年)などを作ります。

このほかに沼津との関係として、第二期(平  
成四く五年度)燦々ぬまづ大使や、山口源大賞  
選考委員(平成七く十三年)および委員長  
(平成九、十三年)を務めました。

また、芹沢光治良の生誕百年記念講演会  
(平成八年)をはじめ、多くの講演会の講師と  
して沼津を訪れ、平成九年には沼津市特別表  
彰を受け、平成十六年に沼津市と三島市から  
それぞれ名誉市民の称号を贈られました。

■大岡信の作品から

次の詩は、大岡が沼津中学時代に同人誌『鬼の詞』に発表した作品で、自身が初めて作った詩と位置付けているものです。

朝の頌歌（詩）

朝は 白い服を着た少女である

朝は

谷間から

泉から

大空の雲から

野末のささやかな流れから

朽ちた木橋のたもとから

その純白の姿を

風に匂はせながら静かに現れる

霧が無数の水滴となつて

静かに静かに降りそそぐ

黒い柔らかな土に

冬を蹴とばして萌え出た薄緑の若菜に

朝のしじまに籠る家々の屋根に

しづしづと降つては

新鮮な色に映える

その時 霧の中には

清らかな髪の少女が微笑み

やがて地上は朝の歡びに溢れる

歡びは

朝の卷毛にしたたる

すつきりとすきとほつた

清い髪の中に宿るニンフである

日が霧の彼方に

羞ぢらひつつ 紅らみながら昇つて来ると

地上にはほのかな弦の音が響いて

やがて 人々は

霧のひそかな手に目覚めつつ

今日も生命の歡喜に満ちて

無限の歴史の連鎖の一環を作り出す

（一九四七・一・六）

初出 『鬼の詞 第六号』昭和二十二年

初刊 「水底吹笛（初期詩篇 昭和二十一〜二十七年）」

『大岡信著作集 第三卷』昭和五十二年 青土社



同人誌『鬼の詞』（大岡かね子氏所蔵）



同人誌『鬼の詞』を発刊した仲間と 前列左より 一人目、大岡信（大岡かね子氏所蔵）



## わが沼津（随筆）

伊豆の三島に生まれて中学は沼津に通ったから、友人は三島や沼津、また熱海にも御殿場にもその他の土地にもいるという幸せを持った。今の学区制というものがまだ施行されていなかった戦中の中学新入生だったので、御殿場線や伊東線、また沼津の南方にひろがる内海の町村や、中伊豆方面からも、少年たちが県立沼津中学（現沼津東高校）に集ってきたのである。同じ中学の大先輩でいえば、芹沢光治良氏は沼津市のやや郊外にある港湾の我入道の出身だし、井上靖氏は中伊豆育ちで、そういうさまざまな土地から集ってきた少年たちが形づく一つの社会は、これでなかなか複雑なものだったと、今にして思う。（略）

一言でいってこの沼津という町はハイカラだった。三島が古くからの宿場町として、お女郎じょろうさんのイメージとともに知られてきたのに対し、沼津はさわやかな海風のあがってくる開かれた交易の町であり、活気にあふれた文化の町であると感ぜられた。光の降る量が少しばかり多

いような感じだった。とくに沼津駅から千本浜へ行くときに、どの道をとるにせよ通過していかなければならない商業の中心街は、これぞ洗練された都会という印象だったのを、三島っ子として思い起こす。

千本浜の千本松原がそのむこうにあって、海水浴場としてまことにすぐれた場所だったが、何といってもそこに生えている松原がみごとだった。「幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく」という若山牧水一代の名歌の自然石の歌碑が、千本公園の松林の中にあって、私は母に連れられて海水浴に行ったとき、この石によじのぼろうとしてがんばった記憶がある。

『うたのある風景』昭和六十一年 日本経済新聞社



昭和 45 年  
(大岡かね子氏所蔵)

次に紹介する詩二編は、いずれも妻・かね子（筆名 深瀬サキ）への思いを詠ったものです。大岡は、のちに妻となる相澤かね子に会うため、かね子の住む沼津へ何度も訪れました。

### 春のために（詩）

砂浜にまどろむ春を掘りおこし

おまえはそれで髪を飾る おまえは笑う

波紋のように空に散る笑いの泡立ち

海は静かに草色の陽を温めている

おまえの手をぼくの手に

おまえのつぶてをぼくの空に ああ

今日の空の底を流れる花びらの影

ぼくらの腕に萌え出る新芽

ぼくらの視野の中心に

しぶきをあげて廻転する金の太陽

ぼくら 湖であり樹木であり

芝生の上の木洩れ日であり

木洩れ日のおどるおまえの髪の段丘である

ぼくら

新らしい風の中でドアが開かれ

緑の影とぼくらとを呼ぶ夥しい手

道は柔らかい地の肌の上になまなましく

泉の中でおまえの腕は輝いている

そしてぼくらの睫毛の下には陽を浴びて

静かに成熟しはじめ

海と果実

初出「海と果実」（後改題）『東大文学集団』昭和二十七年  
初刊『記憶と現在』昭和三十一年 ユリイカ



かね子と偶然再会し、交際するきっかけとなった  
御成橋付近



昭和 27 年 相澤かね子と大岡信  
沼津のかね子宅で撮影  
(大岡かね子氏所蔵)

### サキの沼津(詩)

空を映してゐるとき、海は  
もう真夜中とはちがふ海だ。  
きみをおもふとき、ぼくは  
雪の焰ほのおに身を運ばせる。  
海くぐり抜け、

月のきみを  
空高く浮かべてやる。

きみの胸が掌てに重い。

二人のあひだの百キロの距離は、  
綱渡りすべきわが地平線。  
夜をこめて

ぼくはそれを端はしまでたどる、  
暁方の疲弊ひへいのなかで  
つひにきみの戸を叩くまで。

テーベ↑の住むきみの肺の戸。

葉が落ちる。

鳥が高い。

明るくなつた冬ざれの野に  
ぼくらの足が道をつくる。

仮眠してゐる苦しみありの蟻。

やつらの目覚めを恐れつつ  
それでもぼくらはやつらのために  
道をつくる、ぼくら自身で。

ごらん、

海が空を映すとき

いつびきびきづつの魚の眼玉を

一輪づつの陽がふちどる。

沈みながら、魚は平たい下顎で

岩藻をついばみ

眼をあけたまま眠りこむ。

知らずに深く苦しんでゐる魂のやうに。

わかるかい、

ならんで立つぼくらの横に、

べつのぼくらが

ふかぶかと眠つてゐるのが。

おお 苦しみも知らず

眠つてゐるのが。

だからぼくは何度でも

雪の焰ほのおに身を運はこばせる。

『水府 みえないまち』昭和五十六年 思潮社

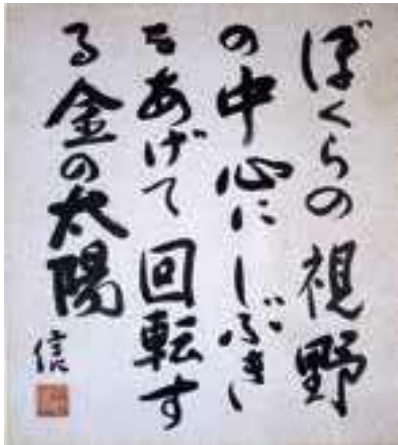
注

(1) 結核けっかくのこと



昭和 31 年 相澤かね子と大岡信

沼津の石川周子宅で撮影 撮影：石川周子（大岡かね子氏所蔵）



碑文を記した色紙  
(沼津東高校所蔵)



母校・沼津東高校にある詩碑



平成 6 年頃  
(大岡かね子氏所蔵)



など多数

■読める大岡信の作品

多数刊行されており、ここではその一部を紹介  
します。

新書版

『詩への架橋』(昭和五十二年 岩波書店)

『折々のうた 第一巻』(昭和五十五年 岩波書店)

文庫版

『自選 大岡信詩集』(平成二十八年 岩波書店)

『うたげと孤心』(平成二十九年 岩波書店)

千本松原を愛した歌人

若山 牧水 明治十八〜昭和三年



昭和3年1月  
(沼津牧水会所蔵)

明治十八年、宮崎県東臼杵郡東郷村坪谷(現・日向市)に生まれます。本名は繁。

明治三十

四年、学校の発行した校友会雑誌に短歌や小論文を発表し、また、翌年から各種の雑誌や新聞に散文、短歌、俳句、新体詩を数多く投稿します。

明治四十一年、早稲田大学英文科を卒業し、第一歌集『海の声』を出版します。

大正九年に沼津へ移住し、香貫山の麓に借家住まいをしましたが、大正十四年に沼津市本字南側(現・本西松下)に新築した家に移り



千本松原での牧水  
(沼津牧水会所蔵)

ます。沼津を詠った作品は数多く、沼津移住後に刊行した歌集に『くろ土』(大正十年)、『山桜の歌』(大正十二年)や牧水の死後刊行された『黒松』(昭和十三年)などがあります。特に千本松原を愛し、大正十五年に静岡県により千本松原の伐採が計画された際には、その反対運動の中心となりました。

昭和三年、死去。四十三歳。沼津市幸町にある乗運寺に眠っています。

■作品に描かれる沼津

香貫山（随筆）

登ったのはツイ近頃のことであった。惜しいものに手を触るる様な躊躇を覚えていたのであったが、或る日一番上の子供にせがまれて登って行った。

少し登りかけて先ず私の眼をよろこばしたものは麓に沿うて大きな弧を描きながら海に入っている狩野川の眺めであった。そしてその川に沿うて建ち並んでいる沼津の町の美しさであった。駿河には一体に大きな川が多い。富士、天龍、大井、安倍川などあるが、水量の豊かな事から云ったらこの狩野川に上越すものはない様に私には思われる。（略）

私は子供と共に一つの岩に登って、海を見ることにした。この八歳になる東京育ちの子供は生れて初めて山登りということをするのであった。で、息をはずませながら、あれを見、これを

見、くるくる身体を廻すようにして登っていたのだ。

白く晒された岩の上から見ると、ツイ眼下の麓に我等の住む小さな部落が明らかに見えていた。彼処其処と辿って、自分の家を探して居た子供は、やがて大きな声を出した。

『静かなる旅をゆきつつ』大正十年 アルス

香貫山にある歌碑碑文（短歌）

香貫山いただきに来て吾子とあそび  
ひさしくをれば富士はれにけり



若山牧水歌碑(香貫山香陵台)



大正 15 年 沼津市の地図 (沼津牧水会所蔵)

当時発行された地図に、現在の牧水ゆかりの場所を赤印で掲載

- ・牧水旧居跡「香貫の家」…牧水が沼津に来て最初に住んだ家
- ・牧水旧居跡「市道の家」…香貫山近くの借家から移り、牧水が亡くなるまで住んだ新築の家
- ・沼津市若山牧水記念館…(40 ページで紹介)



## 千本浜公園にある歌碑碑文（短歌）

全国に三百以上あるといわれる牧水の歌碑の第一号で、牧水が亡くなった翌年の昭和四年に建立されました。

幾山河いくやまかわこえさりゆかば寂しさのさび  
はてなむ国ぞけふも旅ゆく



若山牧水歌碑(千本浜公園)

## ■読める若山牧水の作品 文庫版

- 『若山牧水歌集』（平成十六年 岩波書店）
- 『牧水 酒のうた』（平成十九年 沼津牧水会）
- 『牧水 富士山』（平成二十四年 沼津牧水会）
- 『エッセンシャル牧水 妻が選んだベスト・オブ・牧水』（令和元年 田畑書店）
- 『歩く人 牧水紀行文撰』（令和三年 田畑書店）
- 『樹木とその葉』（令和元年 田畑書店）
- 『牧水 鳥』（令和五年 沼津牧水会）

など多数



乗運寺と境内にある牧水の墓(幸町)



## ■沼津市若山牧水記念館

沼津に若山牧水の記念館を作る運動は、戦後三十有余年にわたり牧水顕彰けんしょうの活動を続けてきた沼津牧水会が中心となって、商工業界や教育文化関係等の各界有志が集まり、昭和五十六年に「沼津牧水記念館建設発起人会」が結成されたことに始まりました。

同会の六年間の募金活動が実り、その寄付を受けた沼津市が、建設費の約半分にその寄付金を充あてて、牧水にゆかりの深い千本松原の一角の海岸に面した景



沼津市若山牧水記念館  
所在地：沼津市千本郷林1907-11

勝地に建設、昭和六十二年十一月一日に開館しました。

歌人・牧水の顕彰と沼津市ゆかりの文学者及びその背景となる沼津の文学風土を広く紹介することによって、市民の文化活動を振興し、創造性を育む文化都市づくりを目指すことを目的としています。

展示室では、牧水の生涯を、主に晩年に移住した沼津時代を中心として、短歌、紀行文集等の代表作品、創刊した詩歌総合雑誌や写真等の貴重な資料を通して紹介しています。

また、時期に応じて、様々な企画展示やイベントを開催しています。



展示室



ラウンジ